



義経紀卷才八目錄

成吉思汗マングケ兄弟亦赤アハチとつひの事

秀平ヒデノ死去の事

ひご平ヒゴノが子た判友及よシヤク謀殺の事

せむ末の三良志ミツタカが家たぐらへシラ入る事

あはれを川合戦カハの事

判友及よハツトモ自害ジガイの事

かひあさカハアサが家イヘの事

秀平ヒデノが子たコタはハいハの事



義経記事廿八

此の二の兄中川と云ふの事

たしなむ

去程判友あたるちふらひとせ給くは依あ  
なすは家のりもたむくは所ひはうのさ  
あされも給ふ人こそこのたのひとがなとわの時武義  
とりて給くれたるは次給をもの兄中川あつとと  
うもせ給ふべさう一傳れたるもははるは國西  
國中へ討死しする者ども患の淺深よはる人  
のりて死ななれはみやうあはよはれくさうくと  
給下らるる。并あるたさうどなうたうけける  
由事なるとしてあはたはうのさうの事な





















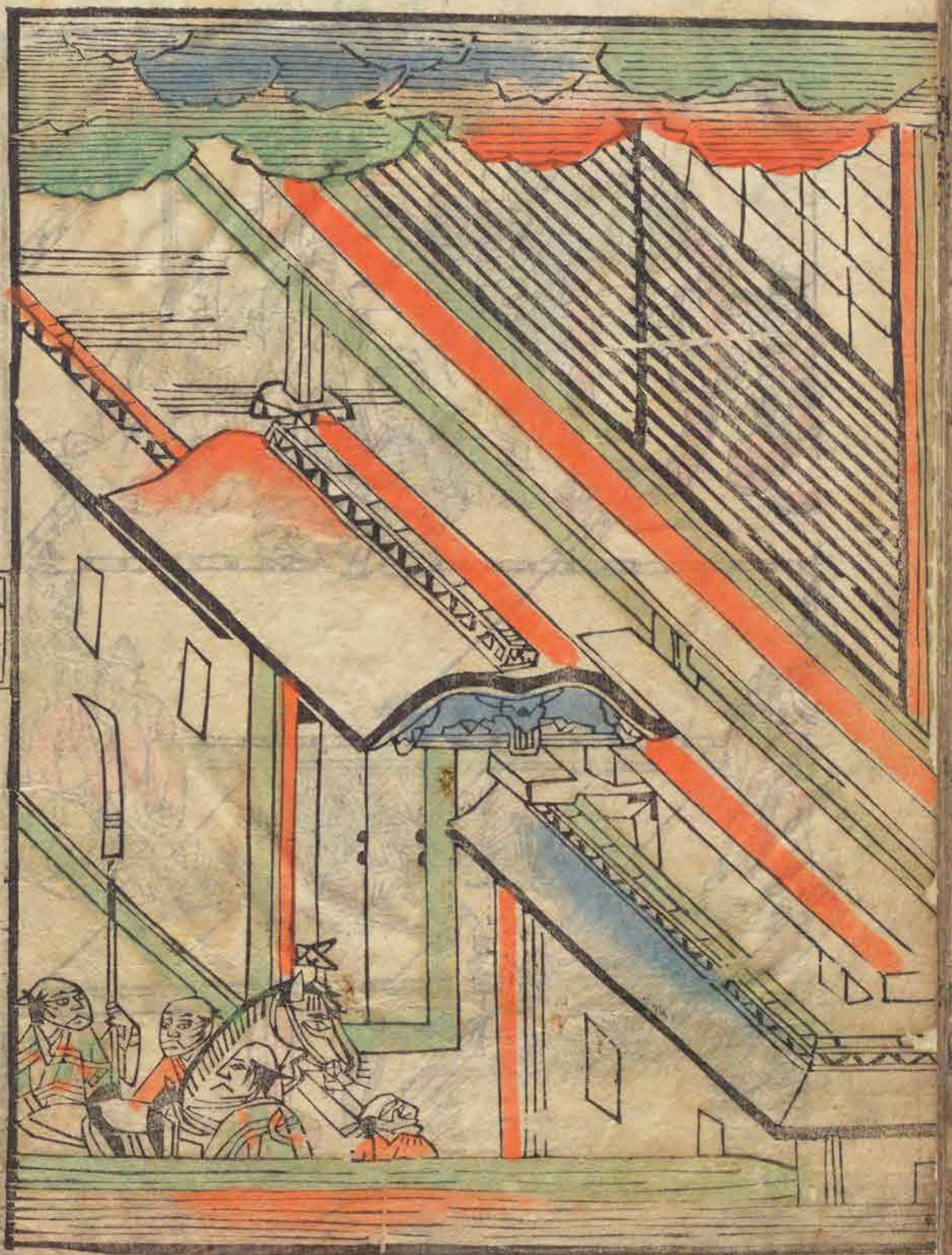












八七

まゝひらりどりの捨くぞ嘆くは落ぬわかれからし事  
 ごとかり

秀平ひらひが子は判友あよ湯板ひらひの事

つてへ道死みちししなれたかゝる事色なく。兄弟あにの子はうら

嘆く判友あへはしてま年とくられり。二月ふたつきの比

安平やすひらが神宮かみみやが小事こじとやまをりかん。秋あきのり人ひとあひまり

てひそふありやとひらよひひたる判友あつたの事

しとひらひよかじお落ひぬらとらなむんと

きひくは合戦あきのたひ人よと死とせられぬわいさ

事ことしはたかり。鳥とりこ四月よしかとわべーこつりたる事

安平やすひらやうくやしうの事よわひひらうが月つきさす人





















八十一

寂めて自家とはづるべし...  
 かの...  
 くが...  
 かな...  
 清...  
 かり...  
 由...  
 水の...  
 宣...  
 かな...  
 用...

...

...



















Handwritten text in a cursive script, likely Japanese Kuzushiji, arranged in vertical columns. The text is densely packed and covers most of the page area.







義よしからは呼よわりのとのらりとはならずもがらり  
 なるぞとはくらわらしがのうくのよらりわらしと  
 ぞとびまとひらくもと。并ならずのいくさられ  
 なる事なれだとしやらその起おわらくく河からとも  
 一いわりくよ西あとびつる人とが死をかげよまりがの  
 十じと討死と。由ゆ來の平や良と敵たり討捕とり力  
 疾はやまりたらひたれば自じ害がして失れどうとくわの尾  
 一いはなりくもとくもいくらくの尾に敵又またさらしとり  
 て志よめさしくらしとまられいびとまらりのさらしとり  
 と一おしのたのさらしてまらりのさらしとり  
 小こさらしとりのさらしとりのさらしとりのさらしとり

八十六

八十六









































秀平ひでひらの事

つて安平やすのへの刺友あるの由よしにむせうぬらうなる。於洲あしう始

つるは、そとくは是らうらうらうの者ものとてもうかたのこて

下したにゆく義経よねつねとてのこをうとて。是こゝに現あらわに頼朝よりちかが兄

赤あかとてわががとて院いん直ちかかねばとてくうらうけく打うぬるこ

そ并なら性しやうかねとてやとひひがそとくはあせなるひひ

とあさうひ二人ふたりも外ほかさうとて下したにゆくらとて入いて

ぬさど首くびとてさむとてそひられなるやとて軍いくさ共ともとて

此こゝうらうやとひひうらうとてせんきとてなれせんちん人のぞ

足あし下したく。らむの介まがひ。之こゝ浦うらの介まがひ。た馬助うますけ。大おほくのこゝとて大おほ助すけ。

権けん承じやうとてうらうとてのぞとてうらうとてせんあうらう







